

有利なシュンギクの作り方

東京都中央農業改良普及所

近藤茂雄

シュンギクの特性と栽培の要点

(1) シュンギクは、草丈15~20cmになると収穫、販売することができるので、シュンギクの一生を通して見れば極く初期段階に限られる。従って果菜類栽培と異なり、作業の種類が少なく、しかも短期間で収穫できる。このために栽培は比較的容易で、年に何回も作付けできる。シュンギクの場合、有利な作り方とは1つの作期において良い成果を収めるというだけではなく、年間を通して何回か作付けることにより、土地、労力を合理的に利用し、そのうえ市場価格の変動に影響されず安定した収入を得るということにある。

(2) シュンギクは、ホーレンソウ、コマツナと同様に軟弱葉物の1つとして市場においても重要な位置を占めているが、軟弱であるために荷いたみしやすい。また消費者の立場からは新鮮であることが第1条件になっているため、鮮度を落さず、荷いたみしない荷造り、輸送を考えねばならない。

この点、都市近郊地域で個人出荷のできる生産者は、市場有利性から軟弱葉物の専作経営が成り立ち、安定した経営を行なうことができる。

一方、個人出荷の難しい遠隔地では、鮮度の落ちにくく

い11月より翌春3月にかけ市場出荷し、冬期における現金収入を得ることができる。水田跡地などの休閑地の活用と、農閑期の労力を生かすことができ、経営上合理的な野菜栽培といえるが、共同出荷体制をとらねばならず、出荷費用が多くかかるのでコストは高まり、収益が低下する傾向になる。

(3) シュンギクは、果菜または葉菜の一部（例えばキャベツ、ハクサイなど）のように1株1株を立派に育てることによって収量を高めるというのではなく、できるだけ播幅率を高め多数の個体を均一に生育させて収量を高めるよう栽培技術を駆使して行かねばならない。

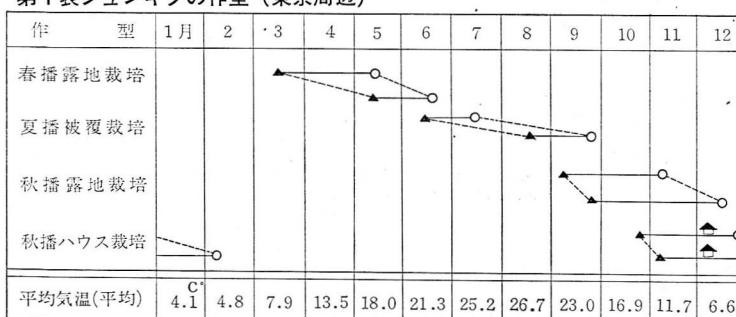
このためには、良質種子の購入がまずあげられる。シュンギクの種子は良否の判別がつきにくいうえ、採種の年、場所により一概に良質無病の種子が安定的に生産されるとは限らない。従って信用のある種苗商より購入することが大切である。

次に栽培畠の土壤であるが、土質は特に選ぶ必要はないが、地下水位が低く、乾燥しやすい土壤では生育が遅れ有利な栽培はできない。例えば洪積台地では灌水施設を考え十分な灌水をして不利な条件を補う必要がある。

適地としては沖積地で、地下水位高く肥沃な土壤を持つ地帯である。このような地帯は、大体土壤水分が平均に保たれ、万一乾燥した場合でも容易に灌水ができるので、水々しく生育の揃ったシュンギクを生産することができる。

(4) シュンギクは、他の葉物栽培と同様に、栽培労力よりも収穫調製出荷労力に時間がかかり、全作業労働時間の75%にも達する場合もある。すでに生産されたものに対し労力がかかるわけであるから、生育段階の作業労力が天候不良、病害虫などにより徒労に終るということなく、この点から有利な野菜といえる反面、収穫時の労力の

第1表 シュンギクの作型（東京周辺）



(備考) 平均気温は東京管区気象台で測定したもの ▲播種期 ○収穫期 介ハウス

多少が作付面積を規制し、一時に大面積に作付けし多収益を得るということはできない。

東京地方では、根付きでワラまたはビニール紐で結束しているが、収穫時1日2人の可動労力がある場合、1回に播種する面積が、夏期で2.5~3a、冬期で5a位とされている。そして出荷の切れ目がないように1週間おき位に連続して播種しているのである。

シ ンギク の 作 型

(1) 春播露地栽培 3月中旬頃より播き、30~60日で収穫期に達する。生育期間の長短は気温に影響されるもので、3月中旬まきは10°以下なので生育初期ののがびにぶく約60日かかり、5月中旬まきでは20°近くなるので生育が早く30日で収穫できる。いずれにしても自然条件下で最も作りやすい作型であり、病害虫の発生も少なく収量は安定している。そのかわり市場価格は年間を通して安値圏内にある。

(2) 夏播被覆栽培 6月中旬より8月下旬に播くので夏期高温時にあたるため、7月上旬より8月中旬の高温時(28°以上)には寒冷紗被覆か、ビニールハウス栽培(サイドをはずす)を行ない、地温を下げるため敷藁、灌水をする。収穫後鮮度が落ちやすいので主として都市農業地域で生産・出荷されている。

(3) 秋播露地栽培 9月上旬より下旬にかけて播種されるもので、春播き同様に露地栽培法がとられるが、播種後強風雨にあい発芽不良となり、まきなおしする場合もある。また強風雨にもまれ、根が湿害を受け草勢が弱まり炭疽病が発生することが多いので、発病前から薬剤散布が必要である。

(4) 秋播、冬どりビニール栽培 10月下旬より11月上旬(13°以下)に播き、冬期間鍋物として需要の多い時期に出荷される作型である。この時期の播種期は微妙で、わずかの播種期のおくれが収穫時には3~10倍の遅れになるので時期を失してはならない。すなわち12月の上旬以降東京では10°以下の気温になり、生育速度が

第2表 シュンギクの施肥例(東京都江東三区地域)

肥料名	元肥	追肥	備考
消石火	100 kg	—	荒起し後全面散布
鶏糞	200	—	同上
磷硝安加里	80	—	平畦を作り、作溝切り前散布
尿素	—	20	必要に応じ灌水、降雨前散布

急速に落ちるので、12月上旬までの期間にできるだけ根部と茎の下部の充実をはかっておく必要がある。また暖冬の年は1月出荷をねらって10月下旬までに播いたとしても生育が予想外に進んでしまい年内にどうしても販売しなければならない状態になるので、この作型の播種に際しては長期予報をよく聞いた上で計画的に行なう必要がある。

栽培のあらまし

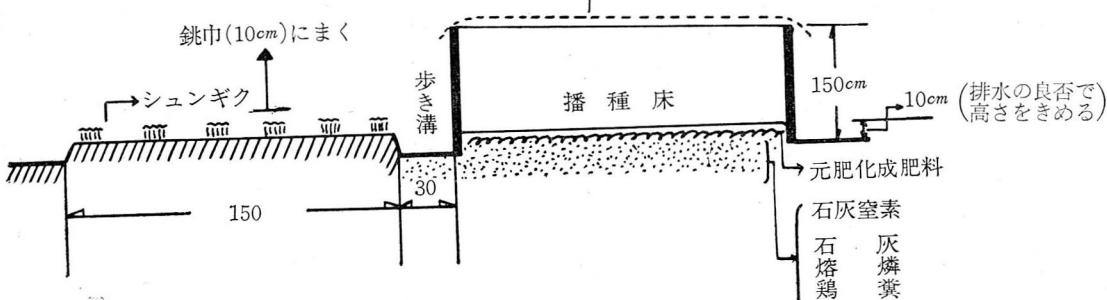
(1) 種子の準備 播種日前日に種子を有機水銀剤で浸漬消毒(1000倍液に30分間)し、水洗い後1昼夜水に浸漬しておく。これは種子に水分を含ませ発芽を早く均一にさせるためである。後記する寄せ作床に播種する場合には10a当たり春夏播きは10~15l、秋播き(ビニールハウス栽培)は18lの種子を用意する。春夏播き栽培で薄播きにする理由は、高温時期に厚播きにすると作溝の中のシュンギクが徒長軟弱になり過ぎたりむれて腐敗する場合があるからである。

播く前までに種子を陰干しにし、生乾きのところへ草木灰をまぶしておくと播種した場合種子の厚、薄状態がよくわかり、播きむらを防ぐことができる。

(2) 畑の準備 畑を荒起ししたあと消石灰、炭カルなどを土壤酸度5.5~6に矯正する量を全面散布し碎土整地する。播き床は、床幅150cm、高さ10cm(高さは地下水位高く排水不良地、水田跡地などはさらに高くする必要がある)、歩き溝30cmの平畦を作った方がよい。

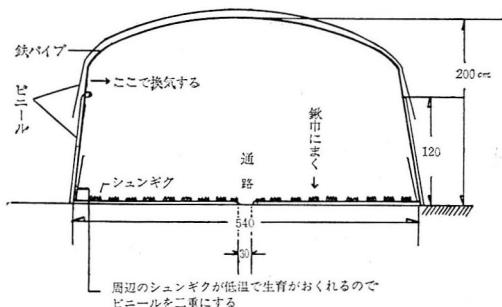
(第1図)

この上に元肥(第2表参照)を全面施肥したのち鋤で
→ 夏期は寒冷紗をかける



第1回 露地栽培

第2回 ハウス栽培



5~6条の播き溝を作る。第2表では施肥量が少ないようであるが、これは野菜の多毛作により土壤に残留成分が多いいためである。沖積層壤土、植壤土においては 10 a当たり N25, P 15, K 15 kg の成分量は必要であろう。洪積層火山灰土壌では、磷酸成分が不足しがちなので、土壤酸度を考えながら、酸度が強い場合は熔成磷酸を、中生に近い場合は過磷酸石灰を十分施す必要がある。

また土壤病害、春期根切虫の発生した畑には石灰窒素を 10 a 当たり 80 kg 位施すことがよい。

寄せ作にして栽培する理由は、夏期の寒冷紗被覆栽培、冬期のビニール被覆に都合がよく、灌水作業も容易にできる。また播幅率が高められるため束数が多くなり、それだけ収益を高めることができる。

(3) 播種とその後の管理 播種当日、播種溝に揚水ポンプで汲み上げた水をホースでたっぷり灌水するか、スプリンクラーで灌水する。溝にそって種子をまき鋤で薄く覆土する。これらの作業は、発芽を揃え均一に生育させるために最も重要な作業であるので慎重にしかも丁寧に行なわねばならない。

台風や夕立による強雨の心配がある場合、気温が 15° 以下で早く発芽させたい場合には、覆土後寒冷紗、古ビニールなどで覆っておく。芽が出揃ったならば、ただちに被覆物をとり除く。

夏播被覆栽培は、強い光線をやわらげるために、1.5 m 位の高さに水平に寒冷紗を張るか、サイドをはずしたビニールハウス内に栽培する。

秋播ハウス栽培は、10月下旬よりハウス内に(第2図)

のように播種した後、気温が 10° 以下になる頃よりビニールを張り、日中はハウス内が 15~20° 位に保つように換気する。

生育中の灌水作業は、沖積層地帯で地下水位の高い畠では、生育中期までに乾燥が激しい時に灌水する程度で間に合う。洪積地帯では灌水は欠くことのできない作業で毎日朝か夕方地温のさがった時に冷たい水を十分かける必要がある。これは地温の高まりを抑える役割りも果すので重要な作業である。また灌水が多いと N 成分の流失が多い傾向になるので緩効性窒素肥料を元肥に施すとよい。11月より 2 月にかけては、生育がゆるやかであり、地温が低いので灌水は露地栽培では行なわない。

追肥としては、生育中期に肥切れした場合に尿素を 10 a 当たり 20 kg を灌水または降雨直前に施す。

病害虫防除で最も心配されるのが炭疽病である。主として 9 月以降発生が多いが、最近は年間を通して発生している。連作した場合、新種を使った場合多いようである。発生初期までに薬剤による防除をやらないと手おくれになるので、種子消毒を必ず行ない、播種 10 日後よりオーソサイド水和剤 400 倍液を 2~3 回位散布しておく。アブラ虫は年間を通して発生するので、DDVP 剤を用意しておき、発生を見たならば 1000 倍液を単用か、また炭疽病防除を兼ねる場合はオーソサイドと混合して散布する。

12 月から 3 月にかけて収穫する露地、小型トンネル栽培では、西北よりの寒風により葉がいためられ、品質が低下するばかりでなく、枯葉が多くなり収穫調製の時これを取り除く労力が多くかかるので、ほ場の西、北側はワラまたはよしずで囲いをする必要がある。

(4) 収穫、調製 草丈が 15 cm になると収穫が始まられる。夏期で播種後 30 日、冬期ハウス栽培で 90 日後頃となる。

夏期は日中を避け日が弱まってから、ほ場で 1 把ずつ束ね、下葉や枯葉を取り除く、根部は土をよく落すだけで水洗いはしない。

10 a 当たり収量は、露地栽培で約 8,000 束、ハウス栽培で 11,000 束である。

